（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報　　告　　書

プログラム名	外国語不安を軽減し積極的に英語を用いた指導を目指す小学校教員の研修プログラム
プログラムの特徴	外国語不安の軽減を目的とし、①外国語不安に対する理解、②英語表現及び非言語コミュニケーションの習得、③外国人との実践的なコミュニケーション体験を通して、参加者が抱く外国語でのコミュニケーションに対する誤った思い込み（完璧な発音と文法でないと通じない等）に気付かせる。外国語不安を軽減することで、英語によるコミュニケーションを積極的に取りながら、自信を持って授業を行おうとする小学校教員の養成を目指す。そのために、英語表現の練習だけに留まらず、実際に英語圏のネイティブ・スピーカーを使ってのコミュニケーション活動や模擬授業などを組み込み、参加者自らのコミュニケーション能力を最大限に伸ばす研修となっている。また、世界25カ国から160人以上の留学生が集う国際教養大学を会場にすることで、英語圏・非英語圏の留学生を積極的に研修で活用する。現状では、ALTは必ずしも教育経験を兼ね備えたネイティブ・スピーカーであるとは限らないため、留学生を活用することで、教室でのALTとのティーム・ティーチングの疑似空間を作り出せる。さらに、研修最終日に行う模擬授業では、国際教養大学が連携している地域等の小学生（約40人）に参加を募り、より実践的な研修にする。校内研修版においても同様の内容を実施するが、各学校の事情を考慮して工夫を凝らし時間的・空間的制約がある中でも実施可能なプログラムとする。

平成２７年３月

機関名：公立大学法人　国際教養大学
連絡先：〒010－1292　秋田市雄和椿川字奥椿岱 193-2
教授　内田浩樹（uchida1659@aiu.ac.jp）
助教　町田智久（tmachida@aiu.ac.jp）

目　　次

国際教養大学学長あいさつ…… 1
秋田県教育委員会教育長あいさつ…… 2
プログラム全体概要…… 3

I　開発の目的・方法・組織
開発の目的…… 4
開発の方法…… 4
開発の組織…… 6

II　開発の実際とその成果
【夏季集中教員研修プログラム】
研修カリキュラムの構成…… 7
研修成果の評価方法及び評価結果……16
【校内研修プログラム】
企画……18
実施……19
評価……19

III　連携による研修についての考察
連携を維持・推進するための要点……20
連携により得られる利点……20
今後の課題……20

資料１　外国語不安尺度……21
資料２　Quick Reference……22
資料３　発音記号学習プログラム……24
資料４　英語コミュニケーション体験……43
資料５　外国語活動模擬授業指導案……45
資料６　小学校外国語活動教員研修〈校内研修版〉……65

Ⅳ　その他
問い合わせ先……68

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

国際教養大学は、教員研修センターからの教員研修開発のための研究助成を２年間にわたり受けてまいりました。本研修モデルは、外国語不安を軽減するプログラムの開発を目指してきました。外国語活動の指導を担当する小学校教諭の英語学習・英語指導に対する意欲を高め、秋田県内の小学校における外国語活動の指導力の向上を目的としたものです。本学教員と秋田県教育委員会の担当者とが議論を重ね、協働でひとつの研修プログラムを作り上げ、本学を会場として県内の小学校教諭に対して５日間にわたる研修を実施してきました。

昨今、大学と地域社会との協働が叫ばれています。国際教養大学と秋田県教育委員会は以前からの協力関係を発展させることを目的とし、本年６月に連携協力協定を締結したところであります。本協定は、教育に関わる幅広い分野での連携を深めていくことを旨としておりますが、秋田県教育委員会との協働での本教員研修の開発・実施は、その連携協力の象徴的な例と言えるでしょう。

本研修プログラムでは、国際教養大学の教育資源である教員及び留学生、さらには大学施設が十分に活用され、小学校の先生方の外国語不安軽減に加えて英語によるコミュニケーション能力の養成が進み、非常に充実した研修となったという報告をいただいております。

小学校においては、2020 年からの英語教科化に向けた議論が政府内でも活発におこなわれております。今後も本学の持てる教育資源を生かしながら、秋田県教育委員会と連携協力しながら教育にかかる諸問題に対して取り組んでいきたいと考えております。

国際教養大学学長

鈴木典比古

小学校外国語活動教員研修

秋田県教育委員会では、平成２１年度より小学校外国語活動のリーダー的教員を育成するために、国際教養大学の多大なる御支援をいただきながら本研修を実施しております。本研修は、夏季休業中の５日間にわたる集中研修であり、外国語活動の指導方法の習得及び英語コミュニケーション能力の向上を図ることを目的にしています。

国際教養大学の先生方による実践に直結する各種ワークショップをはじめ、同大の留学生と近隣の小学生の協力を得ながら行う模擬授業、効果的な英語表現を学ぶワークショップ等は、受講した先生方から非常に高い評価を受けており、これらの研修を通して自身の英語力や外国語活動に対する不安が大幅に軽減されたという声が届いております。

この度、これまでの本研修の成果として、『Hi, friends!』１・２の全レッスンについての模擬授業を収録したＤＶＤ、ＡＬＴとの打合せや授業で使える英語表現集『Quick Reference』及びその音声ＣＤを作成し、報告書としてまとめることができました。作成に当たり、国際教養大学の教員の皆様に多大な御尽力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

本県の小学校外国語活動教員研修の成果を県内外の関係者の皆様方に御高覧いただき、今後の外国語活動及び英語教育の改善に少しでもお役に役立ていただければ幸いです。

秋田県教育委員会教育長

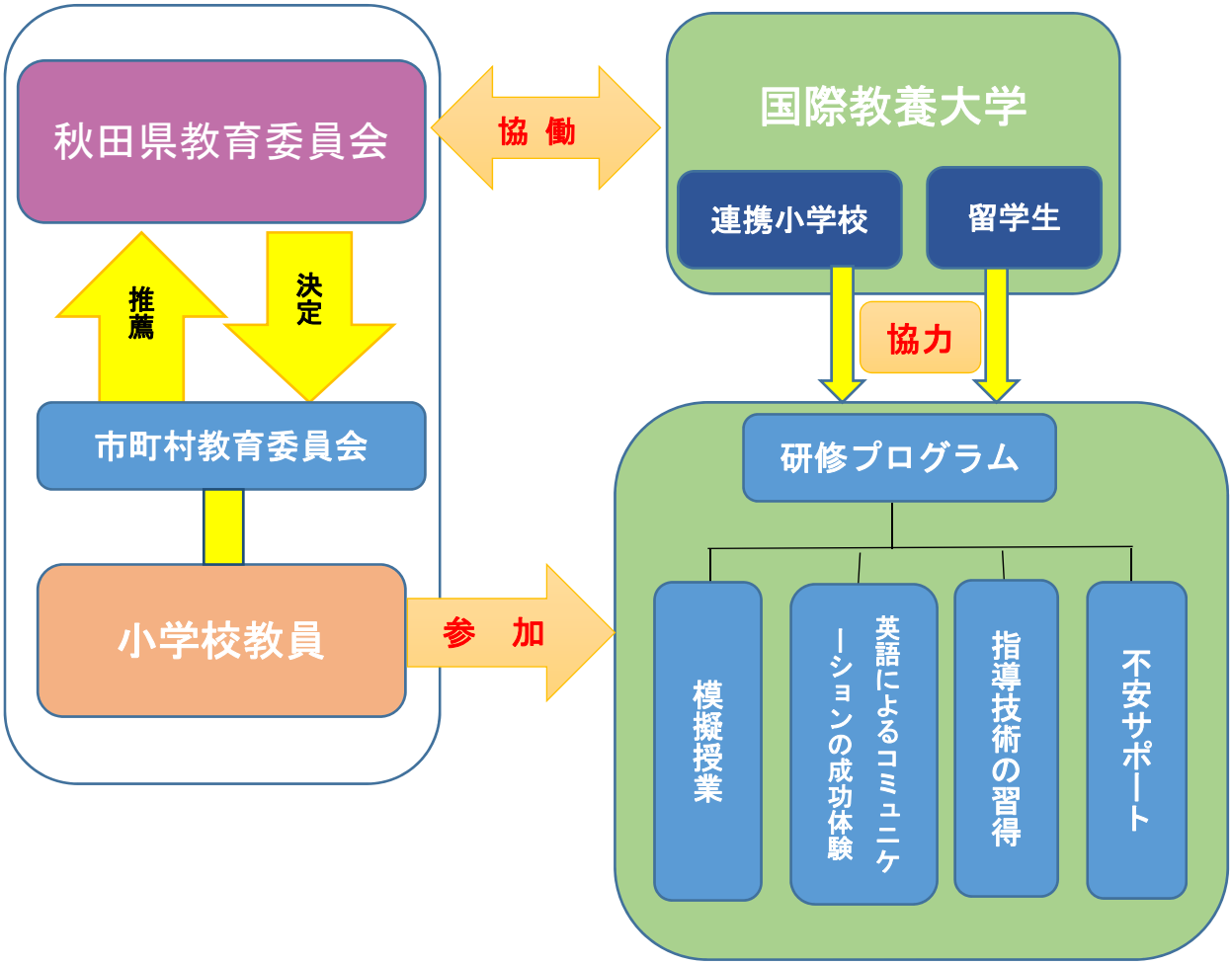
米田　進

Susumu Yoneta

プログラム全体概要

本研究プログラム（図１）は、秋田県教育委員会が実施していた既存の小学校英語教員研修のフォーマットを利用し、「外国語不安の軽減」を目的に各講座の内容を作成し直し、県内の小学校教員に対して実施した英語集中教員研修である。秋田県教育委員会が小学校教員の参加者について募集・決定・召集を担当し、研修の運営に携わった。国際教養大学は、研修内容の作成及び実施を担当した。その他に、国際教養大学の人材活用として、外国人留学生を ALT 役で研修に参加させ、また大学の地域との連携を生かして地元小学生にも参加してもらいながら研修を実施した。

図１．小学校教員の外国語不安を軽減させる研修プログラムの全体概要



Ⅰ　開発の目的・方法・組織

1.　開発の目的

国際教養大学は、平成 20 年から秋田県教育委員会と連携して小学校での英語教育に関する課題に取り組んでいる。平成 25 年度は小学校外国語活動をテーマに貴事業を協働で実施した。小学校教員を対象とした外国語不安を軽減させるプログラムで、外国語不安に対する理解や英語表現の習得、さらには ALT 役の本学の外国人留学生との実践的なコミュニケーションを通して、参加者の多くが研修終了時に外国語不安を大幅に軽減させた。その後の追跡調査では、外国語不安を軽減させた小学校教員が積極的に英語を使った指導を行い、児童の外国語学習にも大きく寄与している実態が報告された。県内の各市町村教育委員会からは、昨夏の研修プログラムへの好意的な評価と共に今後の研修継続への期待が寄せられた。2020 年の小学校での英語教科化にむけて、英語のコミュニケーション能力と指導力を兼ね備えた教員の養成は、秋田県教育委員会にとっても近々の課題であり、国際教養大学と一層連携していくに至った。そのため、①県全体での小学校教員の外国語不安軽減を目的とした夏季教員研修プログラムを一層推進すると同時に、②各小学校内でも同様の内容を可能にする校内研修プログラムを作成・実施する。夏季教員研修プログラムでは、昨年度未収録であった『Hi, friends!』のモデル授業７課分（５年生４課、６年生３課）を研修の中で作成・実施・収録し、『Hi, friends!』全体のモデル授業案を完成させ、全国へ配信する。校内研修版のプログラムにおいては、秋田県教育委員会と協働でモデル校を数校指定し、各校で実施できる校内研修の体制作りを整えた上で実施する。本研修プログラムでは小学校外国語活動を指導する秋田県内の小学校教員を対象とし、自身の今ある英語能力を駆使してコミュニケーションを行う機会を多く取り入れることで、外国語不安を軽減させ積極的に英語を使わせることを目的としている。これにより、もともと高いと言われている秋田県の小学校教員の指導力を十分に発揮させ、児童への効果的な指導へとつなげていく。

2.　開発の方法

プログラムの開発に向けては、「外国語不安の軽減」というプログラムを通した目的を、４つの柱（①不安に対するサポート、②実践的な指導技術の習得、③英語によるコミュニケーションの成功体験、④ティーム・ティーチングの模擬授業）を設定して各講座の内容を決定した。

①　不安に対するサポート

ここでは、外国語不安そのものに対する理解を深めるとともに、不安を軽減するための方略の習得やアクティビティーを中心に実施した。多くの参加者が外国語不安の存在については体験等から気づいてはいるものの、その原因や発生のメカニズムについては詳しく理解していなかった。そのため、外国語不安に対する理解を深め

る講座を研修の最初に組み込んだ。さらに、理解した上でどのようにその不安を軽減していくかという手立てについて学ぶ講座を、プログラムの中に組み込むこととした。

② 実践的な指導技術の習得

外国語不安に対する理解を深めながら、同時に具体的な英語の知識や指導技術についても研修を深めることで、不安の軽減につながると考えた。そのため、ここでは「英語と日本語の発想の違い」「音声記号を使った発音習得」「教材提示の順序」「ALT との授業前・授業中に使う英語表現」についての講座を設置し、参加者の指導技術の向上をねらった。英語の言語上の特徴を日本語と比較しながら提示したり、具体的な教材を題材としながら授業を効果的に進める上でのヒントを解説するなどした。

③ 英語によるコミュニケーションの成功体験

ここでは、参加者自身に自分の英語（非言語行動やブロークン英語も含める）が伝わったという喜びを体験させることで、英語を使うことに対して自信を持たせるためのアクティビティーを中心に実施した。具体的には参加者を４人ずつのチームにし、そこに国際教養大学に在籍する海外からの留学生を１人ずつ割り当て、コミュニケーション活動をしてもらった。国際教養大学は、世界 26 ヵ国から 165 人の留学生が学んでいる。約半数が英語圏の出身である。それ以外の学生も皆、自国言語の他に英語が堪能でその上で第三言語も話せるなど、多言語話者が多い。その豊富な人材を活用して、コミュニケーション活動を実施した。

④ ティーム・ティーチングの模擬授業

この研修では外国語不安の軽減を目指していることから、単独ではなく ALT とのティーム・ティーチングを想定した模擬授業を参加者に課した。ここでも国際教養大学の留学生を活用した。その理由は、現在各小学校に勤務する JET プログラム等の ALT は、米国等の大学卒業者ではあるが日本語能力や日本の学校教育に対する知識も教授経験もあまりない。その状況から考えると、国際教養大学の留学生もネイティブ・スピーカーが多いことから、実際の ALT の経験や知識とさほど変わらない。そのため、留学生を ALT 役として活用することとした。また、地元の小学生 41 人にも児童役で参加してもらうことで、より現実の教室状況に近い形で模擬授業をおこなった。具体的には、４人からなる各班に 20 分間の授業を実施してもらった。各班の中では１人が５分ずつ ALT 役の留学生とのティーム・ティーチングをおこない、教材は『Hi, friends!』を使用するものの、全ての班が異なる課を担当した。

3.　開発の組織

プログラムの開発に関わり、国際教養大学と秋田県教育委員会とで作業を分担した。国際教養大学側は、内田、町田の二名の教員が具体的なプログラムの中身（各講座の内容）を作成・実施し、職員二名が事務処理及び研修当日の運営作業に当たった。一方、秋田県教育委員会は、指導主事五名を含む七名の職員がプログラムの枠組みの決定（ロジ、日程等)、参加者の募集・決定・召集、研修当日の運営作業を担当した。本研修の開発体制及び講師陣については以下の通りである（表１)。

表１．本研究プログラムの開発体制

	所属・職名	氏　名	担当・役割	備　考
国際教養大学	国際教養大学大学院･教授（英語教育実践分野領域長）	内田浩樹	研修プログラム企画・開発・運営責任、全体統括と連携、教材開発、プログラム総合評価責任、県教委と講師陣との連絡・調整統括、研修講師	英語教育[修士]
	国際教養大学英語集中プログラム・助教	町田智久	県教委と大学との連絡・調整、研修プログラム企画・開発・運営・評価、事務処理、教材・資料編纂責任、研修講師	教育学[Ph.D.] 英語教授法[MA]
	国際教養大学研究･地域連携支援チーム・リーダー	日比野浩平	渉外、小学校との連絡・調整統括、事務処理、研修の運営	
	国際教養大学研究･地域連携支援チーム・スタッフ	金由貴子	渉外、小学校との連絡・調整、備品調達、事務処理、研修の運営	
秋田県教育委員会	秋田県教育庁高校教育課・主幹兼班長	小椋富二	研修プログラム執行統括	
	秋田県教育庁高校教育課・副主幹	関谷美佳子	県教委と大学との連絡・調整、プログラム総合評価、参加者の募集・召集、研修プログラム運営、研修講師	
	秋田県教育庁高校教育課・指導主事	珍田良浩	県教委と大学との連絡・調整、参加者の募集・召集、研修プログラム運営、研修講師	
	秋田県教育庁義務教育課・指導主事	安田和人	研修の運営	
	秋田県教育庁北教育事務所・指導主事	石井むつみ	研修の運営	

	秋田県教育庁中央教育事務所・指導主事	相馬　仁	研修の運営	
	秋田県教育庁南教育事務所	小西　力	研修の運営	

また、カリキュラムを作成するために国際教養大学を会場として、担当者間の協議会（打ち合わせ会）を定期的に開催した。この協議会では、研修の枠組みや各講座の内容、さらには具体的な評価の方法や研修運営における諸課題についてなど、国際教養大学と秋田県教育委員会の担当者が必ず参加して実施した。具体的な日時及び協議会の開催内容については、以下の通りである。

第１回（5/14）：研修内容の概要の決定、運営方針の確認等
第２回（6/10）：研修の内容及びプログラムの詳細について、教室確保状況等
第３回（7/17）：事務手続きについて、各研修内容の詳細、参加者のグループ分け
第４回（8/4）：各研修の最終確認、校内研修実施状況
研修プログラム（8/4-8/8）
第５回（9/10）：プログラムの評価、参加者からのフィードバック等
第６回（10/8）：報告書の作成分担、まとめに向けた方針の確認
第７回（11/19）：報告書作成に関する協議等
第８回（12/17）：来年度に向けての課題や連携のあり方について

II　開発の実際とその成果

【夏季集中教員研修プログラム】

１．研修カリキュラムの構成

本研修カリキュラムは、４つの柱（①不安に対するサポート、②実践的な指導技術、③コミュニケーションの成功体験、④ティーム・ティーチングの模擬授業）を中心に構成し、小学校教員の外国語不安の軽減を目指した。それぞれの柱の講座は以下の通りである。

① 不安に対するサポート

ねらい：外国語不安そのものに対する理解を深めるとともに、不安を軽減するための方略を習得する。

「**外国語活動の現状**」(8/4, 10:10-11:25、国際教養大学　町田)

〔講義内容〕外国語活動に対する取り組みとその現状について、文部科学省や秋田県内のデータをもとに説明を行った。このワークショップの目的は、同じ県内であっ

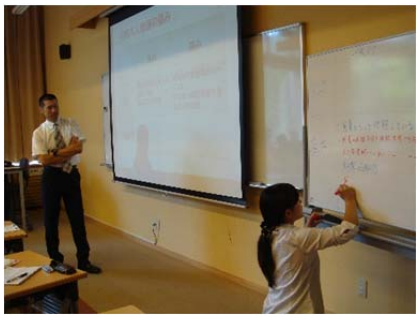
ても他校の実践の様子など普段中々知る機会の少ない教員に、多様な外国語活動の実践やその取り組みを紹介することで、外国語活動そのものへの理解を深めてもらうことにあった。このワークショップは最初のワークショップということもあり、A・Bグループが一緒に講義形式で受講した。また、参加者に普段の授業について意見交換させると共に、各グループ内でのウォーム・アップ活動とした。

「外国語不安概観」(8/4, 12:25-13:40、国際教養大学　町田)

(講義内容) 外国語不安についての概要説明や、不安を取り除くための方法などについて活動を通して紹介した。特に、事前アンケートとともに行った外国語不安尺度（TFLAS）の数値を各自で計算してもらい、自らの不安のレベルについて理解するとともに、参加者同士で外国語不安の体験を共有するなど不安に対する理解を深めた。また不安の対処法についても最近の研究例をもとに解説した（資料１）。

「効果的なティーム・ティーチングについて」(8/6, 9:20-10:35、国際教養大学　町田)

(講義内容) 外国語活動で広く取り入れられている様々なティーム・ティーチングの形態及び特性について、実践例を示しながら解説した。また、英語を指導する際の ALT 及び日本人の担任教師それぞれの強み・弱みについて考えさせ、英語の非ネイティブ・スピーカーとしてのモデルを児童に示す重要性等について指導した。



② <u>実践的な指導技術の習得</u>

<u>ねらい</u>：具体的な英語の知識や指導技術を習得し、英語指導に対する自信を向上させる。

「**英語と日本語の発想の違いについて**」(8/4, 13:55-15:10、国際教養大学　内田)

(講義内容) 英語と日本語の発想の違いについて解説し、自身の現在の英語能力を有効に活用してコミュニケーションを取る方法について指導した。特に英語を話す際に、日本語から直訳することなく（例：私はカナヅチだ ≠ I am a hammer)、自分の知っている表現を使って意味を伝える（例：I cannot swim.）活動を重視した。日本語から英語へ逐語訳するのではなく、今ある自らの英語能力を使って物事や考えを英語で表現する方法を指導した。

「**指導手順とその意味・基礎**」(8/5, 9:20-10:35、国際教養大学　内田)

(講義内容) 外国語活動の授業でよく見られる各活動の意味や目的を明確に理解させ、効果的な手順での指導方法について活動を通して指導した。その際に、参加者の知らない言語（スペイン語や韓国語など）を使って例示することで、児童の外国語学習の過程を参加者に疑似体験させ、既知と未知の項目を分ける必要性などについて解説した。さらに、活動の提示順における誤りの分析も行わせた。このワークショップは、A・B のグループが合同で参加した。

「**指導手順とその意味・応用**」(8/5, 10:50-12:05、国際教養大学　内田)

(演習内容) 前時で学んだことを生かしながら、最終日に行う模擬授業で実施予定の各活動の指導手順を実際に組み立てさせる。その中で、指導手順の違いによる教育効果の差について体感させながら、より効果的な指導のあり方について考えさせた。模擬授業のトピック（担当する課）は、全てのグループで異なるように設定した。

「**授業打ち合わせ及び運営に使う英語表現１**」(8/5, 13:05-14:20、国際教養大学　町田)

(講義内容) クラスルーム・イングリッシュやALTとのティーム・ティーチングで使う英語表現を、実際の使用場面を提示しながら解説し、実際に各グループ内でロール・プレイングの形で練習させた。本研修のために、小学校の外国語活動で必要な英語表現85を選定し、A3サイズで両面刷りにした表現集「*Quick Reference*」を開発した（資料２）。このワークショップでは、*Quick Reference*を各参加者が使いながら活動を進めた。

「**英語の音声**」(8/6, 10:50-12:05、国際教養大学　内田)

(講義内容) 英語の音声面での指導に際し、国際音声字母（International Phonetic Alphabet）を使って正しい発音について指導するとともに、参加者が今ある英語力を使って効果的に行えるリズム指導の方法等について解説した（資料３）。少なくとも「伝わる」発音を身につけるために、*"Hi, friends!"*の中で使われている英単語を中心に、発音記号のみを見ながら単語を読む練習を取り入れた。Appleも「アップル」から /ˈæpəl/となるように繰り返し練習させた。

「**ビデオによる授業観察**」(8/7, 9:20-10:35、秋田県教育委員会　関谷・珍田)

(演習内容)実際に県内の小学校教員の行う外国語活動の授業を撮影した実践例を題材にして、授業改善案について参加者に話し合わせた。これまでのワークショップで学んだ知識や経験をもとに、指導方法や教材使用、また授業の展開方法などの視点から、より効果的な指導のあり方について考えさせた。

③ <u>英語によるコミュニケーションの成功体験</u>

<u>ねらい</u>：教員自身が自分の英語（非言語行動やブロークン英語も含める）が伝わったという喜びを体験することを通して、英語を使うことに自信を持つ。

「**異・非言語コミュニケーション体験**」(8/6, 13:05-14:20、国際教養大学　町田)

(演習内容) 参加者の各グループに国際教養大学の留学生を1人ずつ割り当て、英語での

コミュニケーション活動を行った。事前に留学生には日本語を話さないように指導し、当日は英語（または留学生の母語）のみを使って小学校教員とコミュニケーションをさせた。お互いの出身や趣味等、身近な話題から伝え合う活動から始め、片方の持っている情報をもとに絵を描かせるなどのインフォメーション・ギャップ活動を取り入れながら進めた。その際、文法的に正しい英語を話すことにこだわるのではなく、片言英語や身振り・手振りも含めながら伝え合うことに重きを置いて活動させた。参加者には外国語を学ぶ児童の気持ちを疑似体験させると同時に、意思疎通の際に必要な非言語コミュニケーションの有用性についても気付かせた。留学生を参加者全員に紹介し共同で活動させる必要性から、A・Bのグループの合同ワークショップとした（資料４）。

④ <u>ティーム・ティーチングの模擬授業</u>

<u>ねらい</u>：研修で学んだことを生かしながら、より実践的な教室環境でティーム・ティーチングによる英語の授業をおこなう。

「授業打ち合わせ及び運営に使う英語表現２」(8/7, 10:50-12:05 & 13:05-14:20、国際教養大学　内田・町田、秋田県教育委員会　関谷・珍田)

(演習内容) 各グループに国際教養大学の留学生を 1 人ずつ割り当て、グループごとに準備した最終日に行う模擬授業の指導案の内容を英語で留学生に説明させた。しかし、ここでは前日の「異・非言語コミュニケーション体験」とは違う留学生を割り当て、新たなコミュニケーションが生まれるように工夫した。指導案の説明に際には、*Quick Reference* の中の表現を参考にさせた。各グループ及び留学生には、ここでのグループで模擬授業を行うことを伝え、指導内容の理解のみならず、指導者間の意思疎通を深めるように促した。このワークショップでは、留学生の紹介や活動内容の説明の場面では全参加者が一堂に会したが、その後は班ごとに教室を割り当て各班単位での活動とした。参加者は翌日に行う模擬授業のための授業打ち合わせも、英語及び非言語コミュニケーションを使って体験した。

「ネイティブ・スピーカーとの模擬授業」(8/8, 9:20-12:05、国際教養大学　内田・町田、秋田県教育委員会　関谷・珍田)

(演習内容) 参加者が ALT 役の外国人留学生と留学生と協力し合いながら、指定された*"Hi, friends!"*の Lesson を日本人教員１人と ALT 役の外国人留学生とのティーム・ティーチングで 20 分間ずつ小学生に指導した。地元の小学校に協力をお願いし、41 名の小学生には児童役として参加してもらった。20 分の授業を４人で５分ずつ分割し、全参加者が必ずティーム・ティーチングを体験できるようにした。さらに、20 分の授業そのものは１つのまとまりのある指導としてもらい、違う内容を指導するのではなく、指導する日本人教員が５分ごとに入れ替わるシステムとした。各授業を 20 分とした理由は、研修全体の時間的な制約からである。半日で全ての班の模擬授業を終了させる必要があったため、１つの授業を 20 分とした。A・B のグループごとに教室を割り当て、参加者には自分の班が実施する模擬授業の他に４つの模擬授業を観察してもらった。各グループはティーム・ティーチングの指導案を作成し、それに沿った授業を実施した。（資料５）各指導案は巻末に添付した。なお、この指導案は各グループが実際に使用したものであるが、『Hi, friends!』の各レッスンの完成モデルというよりは、考えられる１つの案として提示している。

「**授業をおこなっての振り返り**」(8/8, 13:05-14:20、国際教養大学　内田・町田、秋田県教育委員会　関谷・珍田)

(演習内容) 午前中に行った各班の模擬授業について、A・Bのグループごとに教室に別れ改善点について話し合わせた。その後に大学教員や教育委員会の指導主事らが、各班の取り組みに関して講評及び指導・助言を行った。

２．研修カリキュラムの日程（表２）

日　程	8月4日(月)	8月5日(火)	8月6日(水)	8月7日(木)	8月8日(金)
諸連絡 9:10～9:15		A･B〈レクチャーホール〉	A〈D202〉B〈D204〉	A･B〈レクチャーホール〉	A〈D202〉B〈D205〉
ワークショップ1 (9:20～10:35)	【8/4(月)のみ特別日程】 開講式 *9:30～9:45* オリエンテーション *9:45～10:00* アイスブレーカー *10:00～10:10* 〈レクチャーホール〉	A B 指導手順とその意味(基礎) 内田(国際教養大) 〈レクチャーホール〉	A 効果的なティーム･ティーチング 町田(国際教養大) 〈D202〉 B 英語の音声 内田(国際教養大) 〈D204〉	A B ビデオによる授業観察 珍田･関谷(県教委) 〈レクチャーホール〉	A ネイティブ･スピーカーとの 模擬授業 内田･町田(国際教養大)、県教委 〈D202〉 B ネイティブ･スピーカーとの 模擬授業 内田･町田(国際教養大)、県教委 〈D205〉
ワークショップ2 (10:50～12:05)	A 外国語活動の現状 町田(国際教養大) *10:10～11:25* 〈レクチャーホール〉 B	A 指導手順とその意味(応用) 内田(国際教養大) 〈D202〉 B 授業打合せ及び運営に使う英語 表現1 町田(国際教養大) 〈D204〉	A 英語の音声 内田(国際教養大) 〈D204〉 B 効果的なティーム･ティーチング 町田(国際教養大) 〈D202〉	A 授業打合せ及び運営に使う英語 表現2 内田･町田(国際教養大)、県教委 A･B〈レクチャーホール〉 G1〈D103〉G2〈D104〉G3〈B101〉 G4〈B102〉G5〈D202〉G6〈D203〉 G7〈D204〉G8〈D205〉G9〈D206〉 G10〈レクチャーホール〉 B	A ネイティブ･スピーカーとの 模擬授業 内田･町田(国際教養大)、県教委 〈D202〉 B ネイティブ･スピーカーとの 模擬授業 内田･町田(国際教養大)、県教委 〈D205〉
(12:05～13:05)	昼　食　・　休　憩 *11:25～12:25*	昼　食　・　休　憩			
ワークショップ3 (13:05～14:20)	A 外国語不安概観 町田(国際教養大) *12:25～13:40* 〈D202〉 B 英語と日本語の発想の違い 内田(国際教養大) *12:25～13:40* 〈D204〉	A 授業打合せ及び運営に使う英語 表現1 町田(国際教養大学) 〈D204〉 B 指導手順とその意味(応用) 内田(国際教養大) 〈D202〉	A 異･非言語コミュニケーション体験 町田(国際教養大) 〈A講堂〉 B	A 授業打合せ及び運営に使う英語 表現2 内田･町田(国際教養大)、県教委 G1〈D105〉G2〈D104〉G3〈B101〉 G4〈B102〉G5〈D202〉G6〈D203〉 G7〈D204〉G8〈D205〉G9〈D206〉 G10〈レクチャーホール〉 B	A 授業を行っての振り返り 内田(国際教養大)、県教委 〈D202〉 B 授業を行っての振り返り 県教委 〈D205〉
諸連絡 (14:25～14:30)		A〈D204〉B〈D202〉	A･B〈A講堂〉	A〈D204〉B〈D202〉	
ワークショップ4 (14:35～15:35)	A 英語と日本語の発想の違い 内田(国際教養大) *13:55～15:10* 〈D204〉 B 外国語不安概観 町田(国際教養大) *13:55～15:10* 〈D202〉	模擬授業準備 G1･2〈D204〉 G3･4〈D203〉 G5･6〈D202〉 G7･8〈D205〉 G9･10〈D206〉	模擬授業準備 G1･2〈D204〉 G3･4〈D203〉 G5･6〈D202〉 G7･8〈D205〉 G9･10〈D206〉	模擬授業準備 G1〈D105〉G2〈D104〉G3〈B101〉 G4〈B102〉G5〈D202〉G6〈D203〉 G7〈D204〉G8〈D205〉G9〈D206〉 G10〈レクチャーホール〉	閉講式(14:30～15:00) 〈レクチャーホール〉
	諸連絡　*15:15～15:20* A〈D204〉B〈D202〉 模擬授業準備　*15:20～15:40* G1･2〈D204〉 G3･4〈D203〉 G5･6〈D202〉 G7･8〈D205〉 G9･10〈D206〉		※Gはグループで、1グループ4名です。 ※G1～G5までがA班(20名)、G6～G10までがB班(20名)です。 ※グループ編成については、8月4日の受付で御確認ください。 ※研修会場は〈　〉で示しています。別紙「実施会場図」で御確認ください。		
県教委担当者	◇関谷、珍田、相馬	◇関谷、珍田、相馬	◇関谷、珍田、安田	◇関谷、珍田、小西	◇小椋、関谷、珍田、石井、小西

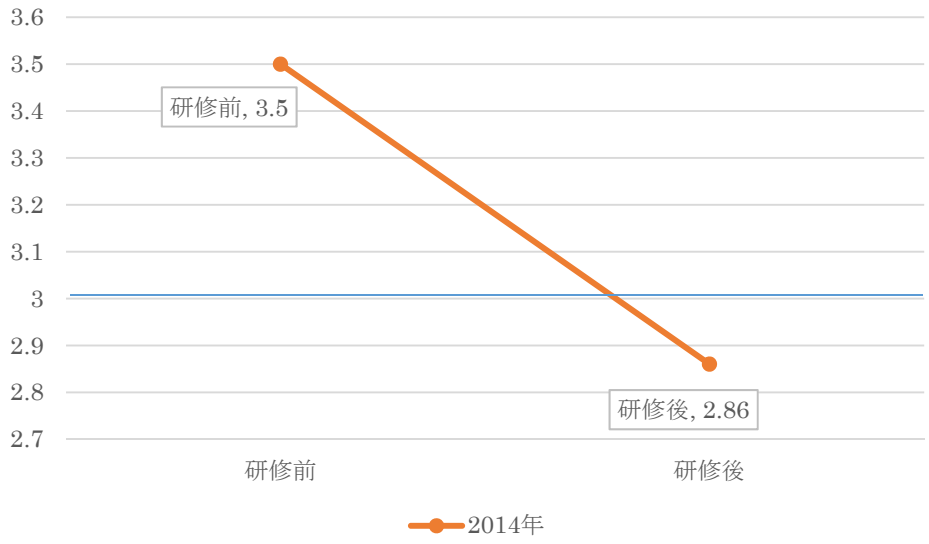
２．研修成果の評価方法及び評価結果

①参加教員の外国語不安の軽減について

研修に参加した小学校教員の外国語不安の軽減については、外国語不安スケール（Teacher Foreign Language Anxiety Scale: Horwitz (2008)）を使用し、研修の前と後での参加者の外国語不安指数を測定し比較した。このスケールは、18 問からなる調査項目に参加者が５段階評価で自らの不安の程度を回答し、その平均を各個人の外国語不安指数とする。本研究では、研修参加者 40 名の全体像についての外国語不安軽減の傾向について調査するため、40 名の各指数を平均した値を研修前と研修後で比較した。

図２に示したように、研修参加者の外国語不安は５日間の研修の前後で大きく軽減している。外国語不安スケールでは、1.00 から 5.00 の範囲で各自の不安指数が算出される。平均値が 3.00 以上で不安があるとされており、それ未満では不安はあまりないとされている。本研究では、研修前の参加者の外国語不安の平均値は 3.50 であり、全体として外国語不安があった。しかし、５日間の研修直後にはその値は 2.86 となり、研修参加者の外国語不安は大幅に軽減された。

図２．研修参加者の外国語不安指数の変化



②研修プログラム全体について

研修プログラム全体の評価については、研修参加者による講座ごとの内容に関する４段階評価及び、記述式による全体への評価を使用した（表３・４）。各講座内容については、「４：大いに満足、３：満足、２、不満、１大いに不満」の項目から各研修参加者が評価し、その平均値を示した。また、プログラム全体に対しては、記述式の自由意見とした。大部分が研修の有効性や自らの研修成果をふまえ

た肯定的な意見であったが、今後の研修の運営方法や活動に対して改善を求めるような建設的な意見も見られた（表４）。代表的な意見を以下に抜粋する。

表３．研修参加者による各講座の評価

期日	ワークショップ名	平均（4段階）
8月4日	外国語活動の現状	3.40
8月4日	外国語不安概観	3.68
8月4日	英語と日本語の発想の違い	3.98
8月5日	指導手順とその意味（基礎）	3.95
8月5日	指導手順とその意味（応用）	3.80
8月5日	授業打合せ及び運営に使う英語表現1	3.78
8月6日	効果的なティーム・ティーチング	3.75
8月6日	英語の音声	3.95
8月6日	異・非言語コミュニケーション体験	3.90
8月7日	ビデオによる授業観察	3.75
8月7日	授業打合せ及び運営に使う英語表現2	3.93
8月4日～8日	模擬授業準備～模擬授業～振り返り	3.93
8月4日～8日	研修全体として	3.98

表４．研修全体への意見

〇一言では語りつくせないほど充実した研修だった。同じ班の先生と絆が生まれ嬉しかった。
〇充実した５日間だった。この研修で英語に対する不安が軽減された。２学期から頑張っていこうという気持ちになった。
〇５日前と違う自分がいることに気付いた。外国人の方を見ても、固まることなく自分から“Hi!”と言える。私も英語というツールをどんどん使って、コミュニケーションを楽しみたい。
〇自分の英語不安がずいぶん減ったことに驚いている。できれば、留学生や ALT と今後もたくさん交流して、自分の力を伸ばしたい。
〇私の外国語不安は「使ったことがない」という経験不足から来ていることが分かった。留学生と話すことで、「ちょっとできるかも」「やってみよう」という前向きな気持ちが芽生えてきた。実際に英語を使う機会があったことが、この研修の中で最も不安解消に役立った。

○それぞれのワークショップが模擬授業に全てつながるものであり、学んだことを振り返りながら進めることができた。討論や演習を入れた内容で、コミュニケーションへの大切さや実際に授業をおこなう上での留意点が分かった。
○この研修に参加できて本当によかった。小学校教員のニーズにとてもよく合っているプログラムだと思う。
○今までは、活動ありきの授業ばかり考えていたが、その考えが間違っていたことが分かった。外国語教育に対しての自分の向き合い方がかわったのが大きな成果だと思う。
○外国語活動を進める上で大切なことを実感を伴って理解できた。何となく嫌だと思っていた外国語活動も、今は早く自分のクラスの児童とやりたいな、楽しそうだなと思えるようになった。
○留学生との交流はとても良かった。特に、授業の計画を一緒に考えることでねらいを共有でき、どちらにも達成感があった。ALT とのコミュニケーションの大切さが分かった。
○この研修の参加人数を増やし、この研修を他の先生にも早く経験して欲しい。
○全員参加の模擬授業はぜひ続けて欲しい。
○”Quick Reference”を CD 化していただけると助かる。通勤時の車内で練習したい。

△模擬授業の際に、準備できるものと準備してきて欲しいものが事前に連絡されていれば、学校から持ってこられると思う。
△指導案の作成が二度手間にならないように、グループ討論の際にパソコンが使用できるようになると助かる。

【校内研修プログラム】

「企画」

小学校教員の外国語不安軽減を目標に据えた夏季集中教員研修を実施し、様々なデータからも非常に効果があることが分かった。そのため、同様の研修をより多くの小学校教員を対象とした形で提供できないかと考えた。時間的・地理的理由から大規模な合同研修は難しいため、研修のエッセンスを短時間の講義・演習形式にまとめ、３日間（90 分×３回）の校内研修として各小学校に大学教員が出向いて実施することとした。研修内容としては、「第 1 回：英語不安を和らげよう」「第 2 回：効果的な指導手順を学ぼう」「第 3 回：ALT と組んでティーム・ティーチングをやってみよう」の３回とした。第１回目と第２回目は、国際教養大学の教員が講義・演習を指導し、第３回目は国際教養大学の大学教員と留学生とが共に小学校を訪れ、留学生を ALT 役として小学校教員にティーム・ティーチングを疑似体験してもらうこととした。県内の各小学校に対する当該校内研修の情報提供は、秋田県教育委員会の指導主事が担当し、申し込み後の日程調整等の連絡は国際教養大学事務局が担当した。研修参加校募集に当たり添付した実施要綱等を作成し、県内の小学校へ配布した。（資料６）

「実施」

本年度は、県内の２つの小学校がこの校内研修に参加している。研修の実施に当たっては、夏季集中研修のエッセンスが効果的に参加者に伝わるように配慮した。短時間での講義・演習ではあったが、なるべく参加者が体験を通して学べるように、活動を多く取り入れる工夫を行った。また、第３回目のティーム・ティーチングにしても、参加小学校と密に連絡を取りあい、一人でも多くの教員が留学生とティーム・ティーチングを体験できるように留学生の人数を増やすなど調整した。各学校間で参加人数や、参加に当たっての心構えが異なっているため、各校に応じた形での研修提供を行っている。研修実施日については、国際教養大学の研究・地域連携支援チーム担当者と各学校担当者が調整を行い、各学校の都合の良い日程での実施を心がけた。

「評価」

研究の評価に当たっては、夏季合同研修と同様に参加者に対して行った外国語不安度の変化及び、参加者の研修に対する自由記述を下に判断した。ただ、夏季合同研修と違い校内研修では、参加者に出席義務がないため参加者の出席に対する意識に差があった。また、参加小学校２校の本研修に対する意欲も違うため、同様の効果を期待するのは現在のところ難しい。参加校の１校は今年度文部科学省の英語教育強化地域拠点事業に指定されている小学校で、参加者の研修に対する意欲も高く、全教員が参加している。一方、もう１校は積極的に学ぼうとする教員は多いが、高学年の担当ではない教員の意欲は必ずしも高いとはいえない。その辺りの意識改革に向けた取り組みも、今後必要になってくると思われる。

Ⅲ　連携による研修についての考察

① 連携を維持・推進するための要点

本研究において国際教養大学と秋田県教育委員会との連携は大変緊密に保たれ、その結果として効果のある教員研修を協働で実施することができた。その際に重要となったのが、担当者間の緊密な協議会の開催である。本研究に関しては８回の協議会を開催し、研修実施に向けた情報の報告・連絡・相談をおこなった。この協議会を開催することで、大学と教育委員会にあるそれぞれの「文化」をお互いに理解し合うことができ、スムーズな研修実施へとつなげることができた。

② 連携により得られる利点

本研究での連携を通して、国際教養大学と秋田県教育委員会との間で得られた最も大きな利点は、お互いの信頼関係である。勿論、以前から国際教養大学と秋田県教育委員会は連携し、様々な事業をおこなってきた。しかしこの２年間ひとつのゴールに向かい、お互いの担当者が頻繁に協議会を開催し、お互いの文化や考え方を理解しあう中から単なる連携以上の信頼関係を構築することができた。今後も、お互いに報告・連絡・相談による情報交換を進め、より良い研修の実施へとつなげていきたい。

③ 今後の課題

今後は研修で得られる成果を、どのように県内及び全国の教員に普及させていくかという点である。本研究では 40 人という比較的少ない参加者の下、プログラムを実施した。英語を指導するに当たり、不安を抱く小学校教員はまだまだ多い。今後、2020 年からの小学校高学年での英語の教科化及び、中学年への外国語活動の前倒しが決定されていることを踏まえ、なるべく多くの小学校教員への本プログラムの実施が不可欠である。その際に、5 日間の研修を全員におこなうのは物理的に難しい。そのため今年度から実施しているような、校内研修という形で本プログラムを実施すべく、短時間・短期間で本プログラムと同様の効果が得られるような改善･改良が必要になってくる。さらに、英語の教科化に向けて教員の基礎的英語力の養成という観点から、本研修内容を更に進化させていく必要がある。来年度以降も秋田県教育委員会と協働しながら、本プログラムの更なる発展及び普及へ向けて努力していきたい。

（文責　国際教養大学　町田智久）

資料１．外国語不安尺度

以下の質問に次の５つの選択肢の中から１つ選んで下さい。
（１）全くそう思わない、（２）そう思わない、（３）どちらでもない、
（４）そう思う、（５）大いにそう思う

1. 他の人が英語で言ったことが分からないと不安になる。
2. 英語で行われる研修を受けることは嫌ではない。
3. 英語のネイティブ・スピーカーが私の英語の間違いに気づくのが心配だ。
4. 私は現在の自分の英語のレベルに満足している。
5. 他の教師の前で英語を話すとあがってしまう。
6. 英語を話すときには、知っていることでも忘れてしまうほど緊張する。
7. 英語を話すためには様々なルールを覚えなくてはならないと思うと、気が遠くなる。
8. 英語のネイティブ・スピーカーと一緒にいると気が楽だ。
9. 英語のネイティブ・スピーカーを前にすると、自信がなくなる。
10. 児童と英語で話すときは緊張しない。
11. 英語で間違いをすることは気にならない。
12. 私は英語の教師になるには十分なくらい英語が話せる。
13. 英語のネイティブ・スピーカーが話している単語が１つでも分からないと不安になる。
14. 自信を持って英語で話すことができる。
15. 私はいつも他の先生の方が自分よりも英語が上手いと感じている。
16. なぜ英語を勉強するのが大変だと思う人がいるのか理解できない。
17. できる限り英語のネイティブ・スピーカーと話すようにしている。
18. 私は英語の教師になるには十分に準備をしてきたと思う。

[出典：『Becoming a Language Teacher』(Horwitz, 2008)]

資料２． QuickReference

QuickReference

85 Useful Expressions for Teachers

Reproduction permitted for non-commercial and educational use only.

Developed by
Akita International University
Akita Prefectural Board of Education
with the support of
National Center for Teachers' Development
based on QuickLook (2002) by Sarah Haas & Hiroki Uchida

For Preparation
準備のために

A When you want to start a discussion, go to A.
ALT と打ち合わせを始めたいときは A へ

B When you want to explain your teaching procedure, go to B.
ALT に指導手順を説明する場合は B へ

C When you want to ask questions, go to C.
ALT に質問や依頼をしたい場合は C へ

D When you want to improve your teaching procedure, go to D.
ALT と指導手順を議論したい場合は D へ

E When you are having trouble understanding what an ALT said, go to E.
ALT の言っていることが理解できない場合には E へ

In The Classroom
教室で

F When you want to see essential expressions in the classroom, go to F.
授業で使う必須表現を確認したい場合は F へ

G When you want to praise or encourage your students, go to G.
児童を褒めたり、励ましたりしたい場合は G へ

For Reflection
ふりかえりのために

H When you want to reflect on the class you have taught, go to H.
ALT と授業のふりかえりをしたい場合は H へ

A

1. Do you have time now?
いま時間がありますか？

2. Can I talk to you later then?
ではまた後で声をかけてもいいですか？

3. When are you available for a meeting today?
今日いつミーティングできますか。

4. I will be available after three.
私は３時以降なら空いています。

5. I want to [discuss / explain] the class for the fifth graders.
５年生の授業のことで【相談・説明】したいのですが。

B

6. This is my teaching plan (for the fifth graders).
これは私が考えた（５年生の）指導案です。

7. Let me explain the teaching procedure.
指導手順を説明させてください。

8. We will use the A/V room today.
今日は視聴覚室を使います。

9. The students will learn the names of some animals.
児童は、動物の名前を習います。

10. Could you introduce yourself in [English / Japanese]?
【英語・日本語】で自己紹介をしてください。

11. We will start the class with this game.
授業はこのゲームから始めます。

12. Activity 2 will go like this:
「活動２」はこんな風に進みます。

A) One student will show a picture card.
１人の児童が絵カードを見せます。

B) One student will say a word in [Japanese / English].
１人の児童が【日本語・英語】の単語を言います。

C) [The other student / Other students] will say the word in [English / Japanese].
【もう一方の児童・その他の児童】は、その単語を【英語・日本語】で言います。

D) The students in the group will take turns to show the picture card.
グループの児童たちは順番に絵カードを見せる役をします。

13. In Activity 3, …
「活動３」では…

A) … we are going to use this [worksheet / handout].
この【ワークシート・プリント】を使います。

B) … we will put these [picture cards / word cards] on the blackboard.
これらの【絵カード・単語カード】を黒板に貼ります。

C) … you will explain the game in English.
あなたが英語でゲームを説明します。

D) … I will explain the game in Japanese.
私は日本語でゲームを説明します。

E) … we will demonstrate the game.
私たちがゲームをやって例を見せます。

F) …the students will work in groups of four.
児童は、４人のグループで活動します。

G) … the students will play the game in pairs.
児童は２人組でゲームをします。

H) …the students will do [rock-paper-scissors / janken], to decide who goes first.
児童はじゃんけんをして、だれが先にやるかを決めます。

14. The students clap their hands, …
児童は手拍子をして…

A) … and read these words on the beat.
これらの単語をリズムに合わせて読みます。

B) … and sing the song on the beat.
歌をリズムに合わせて歌います。

15. We will ask the students to stand up / sit down / sit on the floor.
生徒に【起立する・着席する・床に座る】ように指示します。

16. In this role-playing, you will be A, and I will be B.
このロールプレイでは、あなたが A さんを、私が B さんの役をします。

17. Do you have any questions so far?
ここまでで何か質問はありますか？

C

18. I have a question (to ask you).
質問したいことがあります。

19. What does "weasel" mean?
"weasel" とはどういう意味ですか？

20. How do you say "weasel" / イタチ in [Japanese / English]?
"weasel" （イタチ）は、【日本語・英語】では何と言いますか？

21. How do you pronounce this word?
この単語はどのように発音しますか？

22. How do you spell the word?
その単語の綴りを教えてくれませんか？

23. (Is it) "M" for "mountain" or "N" for "November?"
（それは、）mountain の M ですか、それとも November の N ですか？

24. Could you write the word for me?
その単語を書いてくれませんか？

25. What is the difference between "big" and "large?"
"big" と" large" の違いは何ですか？

D

26. Do you have any suggestions for this teaching plan?
この指導案に何か意見はありませんか？

27. Do you think this will work?
このやり方でうまくいくと思いますか？

28. Can you think of any better ways to do this?
これをするのに何かもっといい方法は思いつきますか？

29. Can you think of a good activity using these words?
これらの単語を使ったいい活動は思いつきますか？

30. I think [the word / the activity] is too difficult for our students.
【その単語・その活動は】、児童には難しすぎると思います。

31. I think our students can [do it / understand it].
それなら児童も【できる・理解できる】と思います。

32. Could you make a sentence using "play?"
"play" を使った文を作ってくれませんか？

33. Can you make [the activity / the sentence] easier for our students?
【その活動・その文】をもっと易しくしてくれませんか？

34. Would you make [a worksheet / a handout] for the students?
児童用の【ワークシート・プリント】を作ってくれませんか？

35. I need a little time to think.
少し考えさせてください。（理解できなくて黙っているのではないことを伝える）

E

36. I'm sorry, but …
すみませんが…

A) … I did not understand your explanation.
あなたの説明が理解できませんでした。

B) … I didn't understand you.
よく理解できませんでした。

37. Can you repeat that, please?
もう一度言っていただけますか？

38. I understand, but I can't express my ideas in English.
理解はできているのですが、自分の考えを英語でうまく言えません。

F

39. Is everybody here?
みんないますか？

40. Who's absent today?
欠席は誰かな？

41. Let's start today's lesson.
今日の授業を始めましょう。

42. Are you ready?
準備はいいですか？

43. Look at the [whiteboard / the cards].
【ホワイトボード・カード】を見なさい。

44. (Please) say it again.
もう一度言ってみよう。

45. Let's [play a game / sing a song].
さあ、【ゲームをしましょう・歌いましょう】。

46. Do you understand?
わかりますか？

47. Can you hear [me / it]?
【私の声・CD など】が聞こえますか？

48. Repeat after [me / John-sensei / the CD].
【私・ジョン先生・CD】に続いて言ってみよう。

49. Take out your [textbook / handout].
【教科書・プリント】を出しなさい。

50. Put everything away.
机の上を片付けなさい。

51. Pick up your [pencil / pen].
【鉛筆・ペン】を持って。

52. Walk around and find a partner.
教室を歩いてパートナーを見つけなさい。

53. Come to the front.
前に出てきなさい。

54. Make pairs.
ペアを作りなさい。

55. Make groups of four.
４人のグループを作りなさい。

56. Sit in a circle.
円になって座りなさい。

57. Any volunteers?
誰かやりたい（答えたい）人はいますか？

58. It's [your / Taro's] turn.
【あなた・太郎君】の順番ですよ。

59. Do *janken*.
じゃんけんをしなさい。

60. Winners, raise your hands.
勝った人は手をあげなさい。

61. Winners will go first.
勝った人が先にやります。

62. You have five minutes.
制限時間は５分です。

63. Let's start.
始めなさい。

64. Time's up.
終わりです。（活動などの終わりを告げる）

65. Put your [pencil / pen] down.
【鉛筆・ペン】を置きなさい。

66. How do you say "apple" / リンゴ in [Japanese / English]?
"apple" （リンゴ）は、【日本語・英語】では何と言いますか？

67. Did you enjoy the class today?
授業は楽しかったですか？

68. See you [later / tomorrow / on Wednesday / next week].
では【またあとで・また明日・水曜日に・また来週】。

G

70. That's right!
その通りです。

71. (You did a) good job!
よくできました。

72. Good guess.
いい答えだね。（正解でない場合でも可）

73. Keep going.
いいよ、続けて。（児童が途中でつまったり、躊躇した場合に）

74. Good try.
頑張ったね。（うまくできなかったときでも可）

75. You are doing fine.
だいじょうぶ、できているよ。（児童が自信なさそうに活動している場合に）

76. Take your time.
時間をかけていいよ。（児童が焦ったり慌てたようなそぶりを見せた場合に）

77. Don't be shy.
積極的に。（児童がしそうにしている場合や、自発的な発言が出ない場合に）

H

78. What do you think of our teaching today?
今日の授業についてどう思いますか？

79. I [think / don't think] the students enjoyed [the game / the activity].
児童は、【ゲーム・活動】を【楽しんだ・楽しめなかった】と思います。

80. I think Game 1 [worked well / did not work well].
「ゲーム１」は【うまくいった・あまりうまくいかなかった】ように思います。

81. [This game / This activity] may work better with [the fifth / the sixth] graders.
この【ゲーム・活動】は、【５年生・６年生】向きかもしれません。

82. We should improve the game.
ゲームを改善する必要があります。

83. How do you think we can improve our teaching today?
どうすれば今日の授業はもっとよくなると思いますか？（打ち合わせの段階でも可）

84. Do you think we should do this activity again?
これをもう一度やってもいいと思いますか？

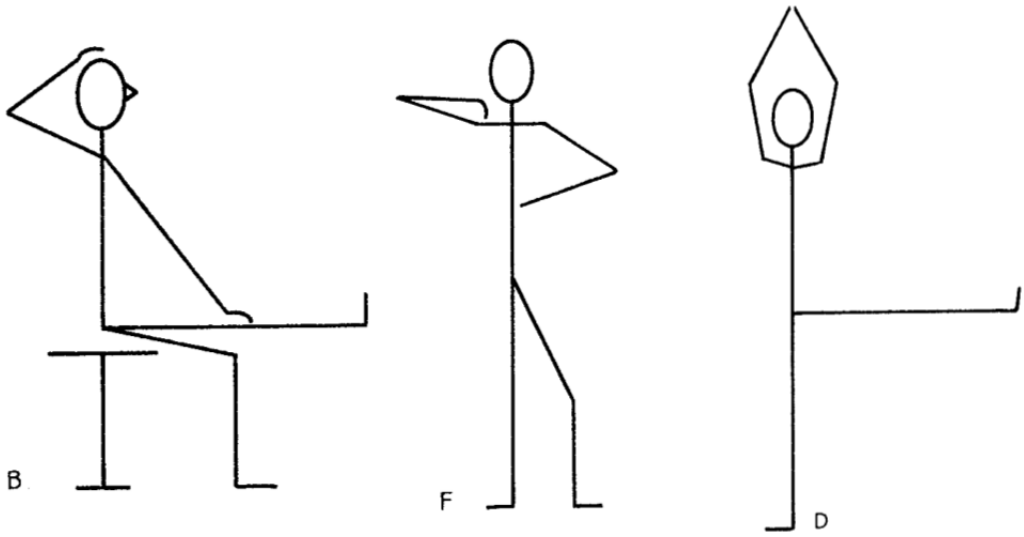
85. I think we went too [fast / slowly].
授業のテンポが【速過ぎた・遅すぎた】ように思います。

資料４．英語コミュニケーション体験

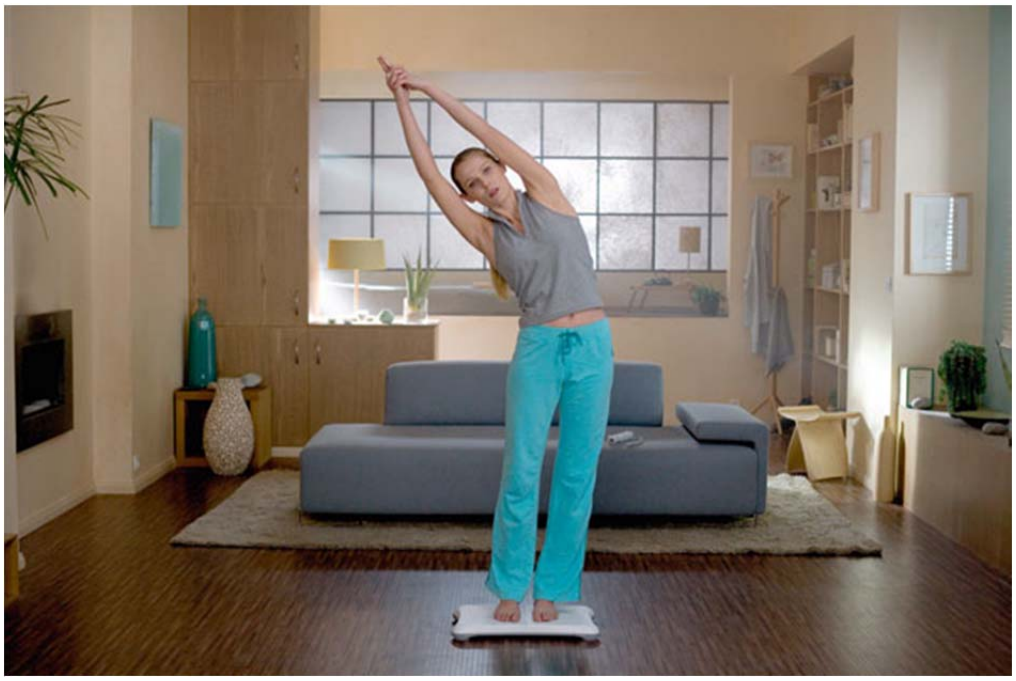
Activity 1:
留学生に次の４つの質問をして下さい。

①留学生の出身国・州で有名なもの
②AIU で楽しかったこと
③秋田県で行ってみて良かった場所
④留学生の将来の夢

Activity 2:



Activity 3:



Activity 4:
There is a table in the middle of the picture and a cat is under the table. He is a white cat. Near the table is a chair. There is a very fat boy sitting on the chair. He is very fat indeed, and very happy, because there is a big cake on the table and he is going to eat it in a minute. The cat is happy too; he is going to eat the mouse which is under the fat boy's chair.

[出典：『Teaching Listening Comprehension』(Ur, 1992)]

資料６．小学校外国語活動教員研修〈校内研修版〉

教　高　－　６　５　１
平成２６年６月１６日

各教育事務所長　様

高校教育課長

小学校外国語活動教員研修〈校内研修版〉の実施について（通知）

平成２６年４月２８日付け教高－２７８で通知している「小学校外国語活動教員研修」について、このたび各小学校における外国語活動の研修を支援するため、本研修の内容に基づいた校内研修版プログラムを県教育委員会と国際教養大学が協働で開発しました。

ついては、別添実施要項を貴管内の各市町村教育員会を通じて各小学校に周知するとともに、本研修の積極的な活用について指導願います。

担　当　　高校教育課
英語教育推進班（珍田良浩）
ＴＥＬ　（０１８）８６０－５１６８
ＦＡＸ　（０１８）８６０－５８０８
E-mail: chinda-yoshihiro@pref.akita.lg.jp

Ⅳ　その他

［キーワード］　英語、小学校、ティーム・ティーチング、授業、コミュニケーション

［人数規模］　C（小学校教員 40 名）

［研修日数］　C（５日間：８月４日～８日）

【問い合わせ先】

公立大学法人　国際教養大学
専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科
教授　内田浩樹（uchida1659@aiu.ac.jp）
助教　町田智久（tmachida@aiu.ac.jp）

〒010-1292　秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱 193-2
TEL 018-886-5900

秋田県教育委員会
高校教育課英語教育推進班
〒010-8580　秋田県秋田市山王 3-1-1
TEL 018-860-5168